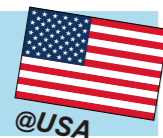




海外で活動する  
芸工生の声

飛田 真代 (2期生 生活環境デザイン学科卒業)  
職種：ウェブディベロッパー  
所属：AKQA San Francisco (www.akqa.com)



現在、サンフランシスコでウェブディベロッパーとして働いています。ちょうど3年経つのですが、去年まではウェブデザイナーとして働いていました。仕事の内容は、クリエイティブの案をどう魅せていくか、アイデアをコーディングしていく、という感じです。

全く英語もできませんでしたし(今もできないんですけど…)、在学当初は海外など意識をしたこともありませんでした。ただ、以前から映像には興味があり、ウェブの会社で働いている間に映画を勉強してみたいと思い、NYへ渡米した際に弊社のクリエイティブのチーフであるイナモトレイさんと会い、それがきっかけで今ここにいる、という感じです。

クライアント・クリエイティブの意図をどのようにユーザーに楽しんでもらうかを考えながらつくるのはとても楽しいです。また弊社はデジタルの広告代理店として注目されているので、最新の技術も常に意識しながら取り組んでいます。

周りでは本当にたくさんの日本人の方々が海外で活躍しています。職種はクリエイティブディレクター、ファッション、カメラマン、パティシエ、ダンサー、マーケティング等多岐に渡ります。日本人のアイデアをつめたり、ディテールを追求する傾向は(アメリカしか知りませんが)非常に買われると思います。一方、アメリカの人は非常に自己アピールがうまいのに対し、日本人は苦手だと思います。しかし自分が何をしたいか、それに自信を持っていれば相手は理解し、興味を持ってくれると思います。

オフィスは  
こんな感じ



シリアの  
計画敷地は  
こんな所



ドバイ  
現場写真



神谷 誠 (3期生 生活環境デザイン学科卒・大学院博士前期課程 伊藤研究室 修了) 所属：CAI (シーラカンスアンドアソシエイツ東京) を経て独立 (kami-lab.com) 職種：architect

現在、ドバイに拠点を移し現地の事務所と共同で設計にあたっています。成熟した日本ではあまり携わることのできない規模のプロジェクトがここ中東ではまだまだ豊富で、シリアでは3,500haの敷地に約25,000㎡のハウジングコンプレックス、レバノンでは約3,500㎡の高層アパートメント、ドバイでは約5,000㎡の個人邸とモスク、サウジアラビアでは約1,000㎡の美術館の設計をしており、すべて企画段階から携わっています。これだけの規模の建物は、日本では会社の規模や実績、信用などで設計者が選ばれることが常識で、私たちのような規模の小さい所は恩師からもからかわれるような立場でした。しかし、こちらでは純粋にデザイン能力で選別してもらえます。国内という枠組みを世界という枠組みへ少し変えるだけで評価軸が劇的に変化するという事は、私自身の既存概念をも壊してもらえた体験でした。

ものをつくることは人、文化、歴史、コスト、技術など、様々なことを思考し、考慮しなくては完成しません。芸術家のような人からコスト優先の業者まで、様々な立場でものづくりを行なう人々が居ます。また、批評者も様々な好みと思考を持った方が存在します。そのような状況下で、自分の「大事に思うこと」と他者のそれとは違う場面も頻発します。それでも安易に妥協することなく、中途半端に利口になることなく挑戦を続けられ、自ずと答えは見えてくるような気がします。学生の方は既成概念や枠組みに囚われすぎることなく、健やかに勉学に勤しんで頂いて、ふと海外で設計をしたいと思われたならお声を掛けてください。挑戦思考の方、お待ちしております。

geikousei@the world

山本 幸 (8期生 生活環境デザイン学科卒・大学院博士前期課程 伊藤研究室 修了)  
所属：The Berlage Institute, Postgraduate laboratory of architecture



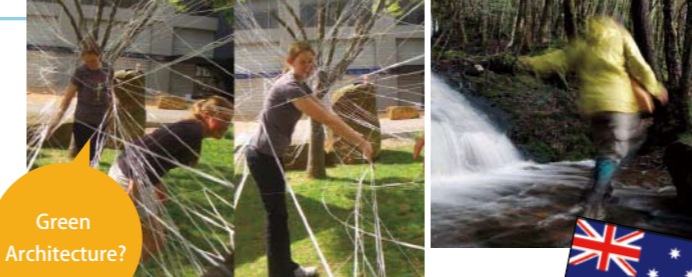
オランダのベルラーへ研究所(大学院)に入  
学し、半年間で2つの設計課題がありました。  
一つはインドネシアのジャカルタに於けるカ  
ンボン(高度経済成長を遂げている都市に残された集落)の調  
査と50年後に向けての提案です(写真下左)。現在、高層ビル  
がカンボンに破壊してきている現状があります。確かにその建  
物の質は悪く、低所得者の人達が高密度に集まっており、違法  
建物やスラム化が問題視されていますが、その集落にはコミュニ  
ティの強さと豊かな空間、伝統的な習慣が残っています。そ  
こで、その良さを生かしつつ、ボックス型の高層ビルの単一的  
な空間に対する、都市における集落の成長の提案をしました。

もう一つはトルコのディアルバクル(写真下右)で、メソポ  
タミア文明以来のスリチという城壁で囲まれた歴史ある街に対  
しての新しいコートヤードハウスの提案です。これは、歴史的  
価値のある建物を保存し、人口が増えていく中で伝統的な建物  
と新しい住居がどのように共存できるかを考えています。伝統  
的住居要素(コートヤード・アイバン)を再思考し、低所得者  
への住宅、崩壊した建物の再利用、経済面からの提案住宅、公  
共施設の提案をしています。また、建物(住居)レベルから都  
市を考えていくことを試みています。

どちらも現地の政府や研究機関と協力しながら学校と現地に  
2週間ほど滞在し活動します。課題の対象地域に実際に行き、  
現地の人とふれあい調査ができることはとても刺激的です。国  
も違えば、言葉も文化も習慣も違  
います。オランダにいながら他国  
とも比較することができ、学生も  
多国籍なので意見も新鮮です。



ジャカルタの  
スタディ  
(左端が筆者)



Green  
Architecture?

守田 真子 (8期生 生活環境デザイン学科卒業)  
所属：Master of Architecture, Faculty of Science, Engineering & Technology, University of Tasmania (タスマニア大学)



南十字星の瞬く星空の下、庭に住みついているワラビーに挨拶をして今日も家に帰ってきました。野生動物を身近に感じながら、原生自然の多く残るタスマニアで「人の暮らしと自然をつなぐ建築」について想いをめぐらせて続けています。

タスマニア大学では建築が環境に及ぼす影響や、エネルギー効率について考慮することが求められます。多国籍・多文化のクラスメイトと「Green Architecture (環境にやさしい建築)とは?」というディスカッションを重ねたりするのですが、育った環境が違えば、建築家の役割についての倫理観も、自然の概念も違う。そのなかで私は哲学、環境倫理学の面から Green Architectureに興味を持つようになりました。

例えば、Natureの反義語がArtである英語圏では、「守るべき自然が人間の活動によって壊されている」という前提からはじまり「建築、都市開発による自然環境へのダメージをどれだけ減らせるのか」と、議論は終始、自然 vs 人工の二項対立(デカルトの心身二元論由来の西洋的な考え方)でおこなわれている。それならば対照的な東洋思想、たとえば心身一如論の視点でGreen Architectureを考えたらどうなるだろう?という問いが、「Green Architecture?」というインスタレーション(写真上左)につながりました。身体をとおして、心が自然とのつながりを感じるための装置としての建築の模索です。

先日タスマニア州政府建築オフィスと共同で州都ホバートの研究をする機会をいただき、一緒に「SPECULATE(思索)」という冊子をつくりましたが、私は特に都市でおこっている自然と人のかかわりについての研究をしました。現在はこの研究をベースに「Healing Space」としての「人と自然をつなぐ建築」の可能性を探っているところです。

geikousei@the world

報告 1 みんなで家づくりプロジェクト「3匹の猫ー絵本と猫と花々に囲まれて暮らす家」プロジェクトの過程を綴ったブログ→3匹の猫 <http://nekoehon.wordpress.com/>

芸術工学部の7期卒業生を中心に在校生も巻き込みながら、絵本と猫と花々を愛する施主さんのための家づくりプロジェクト「3匹の猫」が2010年の春から約1年かけて開催されました。

建築を中心に多分野の社会人・学生のごちゃまぜのチームで、わいわい楽しくかつ真剣に進められた取り組みで、企画から設計、

監理までを一貫して手掛けたほか、土壁塗りワークショップなども企画し積極的に人を巻き込む体験型の事業となりました。

立場や経験、専門の異なる参加者がいっしょになって、根っこのところから議論し、考え、手足を動かすという芸工らしい体験は、気づきや学びがいっぱいだったことと思います。参加者の皆さま、お疲れさまでした!



報告あれこれ



報告 2 鈴木研究室「名古屋だがねランド」日本建築学会賞を受賞  
鈴木研のブログ→山に登るさかな <http://suzukenblog.blog24.fc2.com/>

2006年から毎年夏に名古屋都市センターで開催されている、子どものための建築・まち学習プログラム「だがねランド」が、2011年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞しました。「子どもたちが現在のまちづくりを理解し体験するための巧みで独創的な教育プログラムとなっている」こと、「ファシリテーターとして参加する大学生達にもまちづくりを理解する貴重な機会になっている」ことなどが選考理由です。

鈴木先生をはじめ研究室の個性豊かな学生、建築家、都市センターのスタッフの皆さんが、情熱と汗と遊び心を結集した成果。おめでとうございます!

報告あれこれ

報告 3 食堂のおばちゃんお疲れさま会&川崎和男教授による記念講演会、盛大に開催!

長い間、芸工生の胃袋と心の支えになってくれていた食堂のおばちゃんこと和田静子さん(芸工クロストークのサイト:geikou.jpにインタビュー記事があります)が2011年3月で退職されたことを受け、卒業生有志を中心にして4月24日に謝恩会と川崎和男名誉教授による記念講演会を開催いたしました。おかげさまで、卒業生や在校生、教職員の皆さま総勢160名以上の方が集まる盛大なイベントになりました。和田静子さんおよび川崎先生をはじめ、ご参加・ご協力いただいた皆様によりお礼申し上げます。

おばちゃんお疲れ様! Party実行委員会一同



たくさんの方にお越し頂いて感激しました。とても幸せです。私が長く勤めてこられたのは皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。またお会いできること楽しみにしています。家にもぜひ遊びに来て下さいね。

